

報道関係者各位

2026年5月11日

国立成育医療研究センター

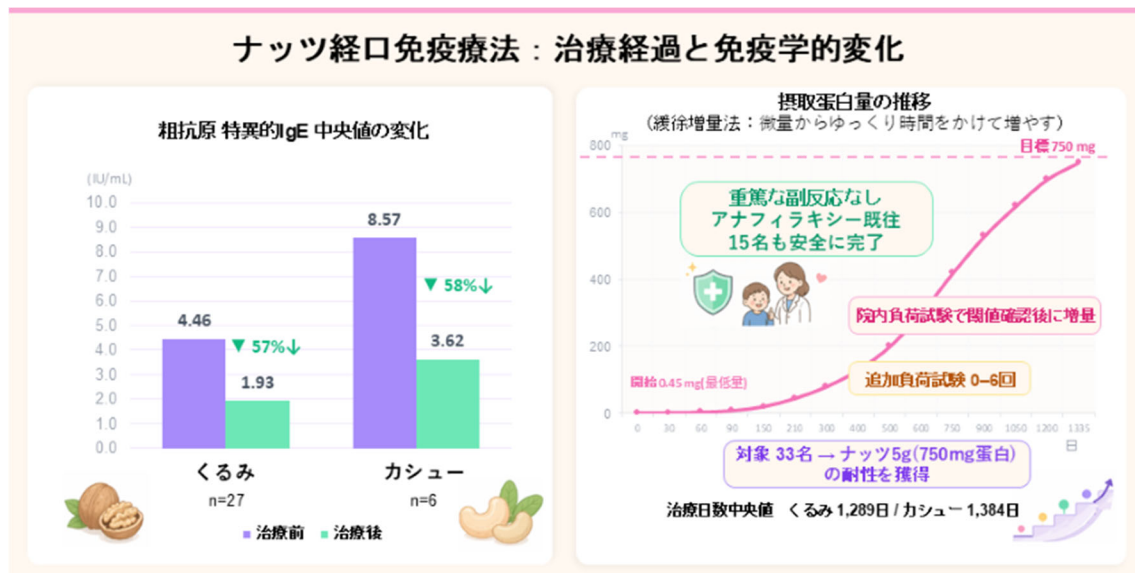
ナッツアレルギー重症例も「治る」を目標にできる
超低用量・緩徐増量法による家庭での経口免疫療法を検証
～アナフィラキシー経験があっても安全に日常生活を送るための新戦略～

国立成育医療研究センター（所在地：東京都世田谷区大蔵、理事長：五十嵐隆）のアレルギーセンター萩野鉦平、濱口冨香、山本貴和子、福家辰樹を中心とする研究グループは、クルミおよびカシューナッツアレルギーの子どもを対象に、「超低用量・緩徐増量法¹」を用いた家庭での経口免疫療法（OIT）の有効性と安全性について研究を行いました。

その結果、解析対象者全員が重篤な副反応を起こすことなく、日常生活で加工食品やコンタミネーション（微量混入）を気にせず生活できる「実用的な耐性」を獲得しました。

本成果は、英国アレルギー学会誌『Clinical & Experimental Allergy』に掲載されました。

注意：食物アレルギーを発症しているお子さんは、自己判断で開始せず、必ず医師の指導の下で行ってください。



【図1：今回の研究結果まとめ】

¹ 超低用量・緩徐増量法：アレルギーの原因食物を「ごくわずかな量」から食べ始め、数ヶ月～数年単位で「非常にゆっくり」と慣らしていく方法。

【プレスリリースのポイント】

- 「治らない」から「治せる」へ：自然治癒率が10%未満とされるナッツアレルギーにおいて、独自のプロトコル（手順）により、日常生活に支障のないレベルの「実用的な耐性」を獲得できる症例があることを明らかにしました。
- 過去にアナフィラキシーを経験した患者さんでも安全に実施：対象者の約半数が重篤な症状があるハイリスク群でしたが、治療期間中にアドレナリンの使用が必要な症例は一例もありませんでした。
- 「実用的な耐性」という新しい目標：全ての制限を解除する「完全治癒」の前に、まずは加工食品や外食、微量混入を安心して受け入れられる「タンパク質 750mg（ナッツ現物 約 5g）」の摂取を確実な目標として確立しました。
- 心理的負担の軽減：負荷試験で「合格した量」を家庭での摂取上限とするため、恐怖心を与えず「楽しく食べて治す」ことが可能です。

【背景・目的】

クルミやカシューナッツは、微量でも重篤な症状を引き起こすリスクが高く、かつ自然治癒が極めて稀なため、これまでは「一生、厳格に除去し続ける」ことが標準的な考え方でした。また、微量でアナフィラキシーが起こるリスクがあります（WHO が示している 5%のクルミアレルギーの方に症状が出る蛋白量は 1.2mg、クルミそのものの量で 0.008g です）。しかし、この「一生治らない」という概念は、患者さんとご家族に多大な心理的・社会的負担を強いてきました。本研究は、こうした「治らない」という従来のコンセプトを、「安全に、確実に、日常生活で困らない状態まで治す」という前向きな目標へと転換することを目的としています。

【研究手法と結果】

2021年から2024年の間に、当センターで治療を受けた4から18歳のクルミおよびカシューナッツアレルギーの子ども33名（クルミ27名、カシューナッツ6名。うちアナフィラキシー経験15名）を対象に調査を実施しました。

1. 超低用量・緩徐増量プロトコル：ナッツ蛋白 0.45mg という極微量から開始し、当センター独自の負荷試験で症状が出ないと確認した量を超えない量で蒸しパンなどの治療用食品を用いて家庭摂取を継続。
2. 主要な成果：
 - 重篤な副反応ゼロ：800日を超える長期治療においても、中等症以上の症状誘発や緊急受診は一例もありませんでした。
 - 免疫学的裏付け：血液検査においても、原因成分（Jug r 1, Ana o 3）へのIgE抗体価が低下していることが示されました。

【今後の展望】

経口免疫療法において、たとえ口腔内の違和感といった軽微なものであっても、アレルギー症状による不快な経験は、患者さんやご家族が治療を中断してしまう大きな要因となります。

当センターのアレルギー治療方針は、「どのような食品、どのような重症度であっても、検査や治療においてアレルギー症状を出さない」ことにあります。不快な症状を避けることで、食べることへの恐怖心（心理的負担）を植え付けることなく、「楽しく食べて治していく」という新しい治療モデルを追求しています。

今回の成果により、「ナッツアレルギー＝一生治らない」という悲観的な見通しは過去のものになりつつあります。今後は、この安全性を最優先したアプローチをさらに蓄積し、より多くの施設で安心して実施できる治療モデルの構築を目指します。

【発表論文情報】

題名：Low-Dose, Slow-Escalation Home-Based and Sustainable Oral Immunotherapy for Walnut and Cashew Allergy: A Retrospective Case Serie

著者：萩野 紘平（筆頭著者）^{1,2}、山本 貴和子（責任著者）¹、神保 智里¹、谷口 智城¹、原間 大輔^{1,3}、大森 茉令¹、鈴木 大地¹、梅沢 洸太郎¹、濱口 冴香¹、石川 史¹、平井 聖子¹、豊國 賢治¹、福家 辰樹¹、大矢 幸弘^{4,5}

所属名：

- 1) 国立成育医療研究センター アレルギーセンター
- 2) 高知大学 医学部小児思春期医学講座
- 3) 山梨大学 大学院総合研究部医学域 臨床医学系（小児科学）
- 4) 名古屋市立大学 大学院医学研究科環境労働衛生学
- 5) 藤田医科大学 ばんだね病院総合アレルギー科

掲載誌：The Clinical & Experimental Allergy

DOI: <https://doi.org/10.1111/cea.70319>

【問い合わせ先】

国立成育医療研究センター 企画戦略局 広報企画室 神田・村上
電話：03-3416-0181（代表） E-mail:koho@ncchd.go.jp